平成30年度　第1回　学校評議委員会　記録

日時　　平成30年6月15日(金)
　　１３：３０～１５：１５
会場　　気仙光陵支援学校

【出席者】

＜学校評議員＞	＜学　校＞
A委員　（卒業生関係）	校長
B委員　（進路先関係）	副校長　　2名
C委員　（地域関係）	事務長
D委員　（地域関係機関）	教務主任
	小学部主事
	中学部主事
	高等部主事
	寮務主任

当日欠席　E委員（教育関係者）

1　開会のことば

2　校長挨拶

・昨年創立30周年という節目の年を迎え、今年度は小学部14名、中学部17名、高等部42名の73名でスタート、生徒が減っている状況です。

・4月5月は子どもたちも落ち着かない様子が見られましたが、2ヶ月経過し現在は落ち着いてきています。5月の運動会では晴天に恵まれ一生懸命頑張っていました。

・今週、小学部では平成3年度から続いている立根小学校との交流があり、岩手日報の取材も来て末永い交流となっている。中学部・高等部は来週から校内・産業現場実習が始まり、午前中に結団式が行われ、働く力を見に付ける学習に子どもたちも張り切っています。

・学校評議員の皆様には、忌憚のないご意見をいただいて今後の学校運営に生かしていきたい。

3　出席者紹介・・・上記出席者のとおり

4　協議

（1）　学校経営計画について（校長）
　　別紙資料により校長が説明

（2）　各学部・寄宿舎運営計画について
　　スライドにより学部主事・寮務主任が説明

（3）　進路指導の状況について
　　資料により担当副校長が説明

（４） 支援事業の状況について

資料により担当副校長が説明

（５） その他

（６） 協　議

（C 委員）：説明にあった「交流籍」、「B 型作業所」の意味、寄宿舎に入る生徒と入らない生徒の違い 3 点について教えていただきたい。

（担当副校長）交流籍について

：支援学校に入学した子どもたちは居住地を離れて通学しているが、その生徒が将来、居住地に戻ってその中で生き生きと充実した生活を送れるように、居住地の小中学校に交流籍を置かせてもらい、年に 1 回～3 回交流している。小学部は在籍 14 名中 13 名が、中学部は 17 名中 9 名が交流している。

（高等部主事）B 型作業所について

：大船渡地区では歴史の古い所として「朋友館」「慈愛福祉学園」があり、最初は作業所だったが、現在は就労継続支援 B 型となっている。就労継続支援には A 型、B 型があり、A 型は働いた分給料（最低賃金の保障）の支払いがあり、職業安定所と関係している。B 型は事業所の基準での工賃が支給される。そのように A、B と分かれている。

（寮務主任）寄宿舎に入る生徒と入らない生徒の違い

：現在、本校でとらえている入舎の理由は３つ

① 居住地と学校の距離がある場合の通学保障

② 家庭・保護者の事情から養育や生活が困難な場合

③ 将来の自立に向けて生活する力をつけたい場合

としている。いずれも入舎にあたっては、保護者・担任・寄宿舎指導員が話し合い、入舎願いを提出、入舎検討した上で入舎となる。

（A 委員）　子どもが本校を卒業、自立考え小学部からお世話になった。地域交流では T 小学校、A 中学校になじんで参加、ことばの教室では舌の筋力つける取り組み、音楽療法などいろいろな経験させていただいてよかった。就学前に出会った子たちと学校で再会し、互いの成長を感じることもあった。小さい頃からいろいろな人と交流することが一番よかった。

ダウン症の子どもの出産率が年々増えている。現在関わっている「こばと会」は当事者・保護者で作っている会。それぞれ経験したことを聞くことで参考になった、子どもを受け止めるまでの時間が楽になったと聞いている。学校でも周知いただけるとありがたい。

（B 委員）　企業の立場で見ていると、障がい者に限らず、若い人たちがコミュニケーションをとれなくなってきていると感じている。全国的に若い人が少なく周りは大人で高齢者が増えており、世代間も親子より孫くらいの隔たりがある。自分から言えない人が若者に増えている。小さい頃から言えるようにすると、困っているときに手を差し伸べやすいと感じている。

（C 委員）　学校出てから子どもたち大事に受け入れてもらえる社会でありたいと感じている。その

ためには学校の力が大きい。授業では繰り返し支援している印象を受けた。自分も体育の授業ではできないことはあきらめず繰り返すという、繰り返しの大切さを頭だけではなく身体で感じるようにと考えている。生徒と先生の信頼関係が大切。礼をする時にできる子どもには、目線を少し前を見るようにすると姿勢がよく見えると感じた。

10 月には、立根川の清掃も声を掛けていただければ協力したい。

（D 委員）　障害福祉の分野では、就労継続支援 A,B 就労移行支援に新たに就労定着支援事業が加わった。現在一関在籍者が増え、利用者さんの進路支援やアフターの支援・・と広がって、かなりハードな就労支援になっている。進路担当や関わる先生は、進路開拓の他、幅広い支援と求められる部分が多くかなり大変になってくると思われる。情報共有しながら協力していきたい。利用者には卒業生も多く、よく先生方の名前が出てくる。学校を卒業したから区切りではなく、つながりが励みや支えになっていることを感じる。30 周年行事はアットホームな雰囲気で地域交流の在り方を見ることができた。

普段は効率を考えてしまっているが、今日、小学部・中学部の授業で自立に向けた手厚い支援を参観し、改めてその大切さを感じた。　今後も就労支援等でサポート・協力していきたい。

（校長より）

貴重なご助言いただいた。コミュニケーションは日頃から意識して子どもたちに目標立てて取り組んできています。実習でも挨拶・返事・報告・人とのかかわりを目標にして発表しており、子どもたちも意識して取り組んでいるところ。我々も実現するために頑張りたいと思っています。

5　閉会のことば